



Data

監督・脚本・原作: 佐藤二朗
出演: 山田孝之/仲里依紗/佐藤二朗/坂井真紀/今藤洋子/笹野鈴々音/駒林怜/太田善也/向井理/大高洋夫/兎本有紀

■■■ショートコメント■■■

◆本作は何ともけったいなタイトルだが、演技派で多様な才能の持ち主・山田孝之の主演だし、美人女優・坂井真紀も出演している。しかし、原作、脚本、監督の佐藤二朗って一体誰？チラシには「鬼才・佐藤二朗が放つ豪華キャスト人による狂演—これは、映画を超えた魂の記録なのかも知れない」と書いてある。また、ストーリーを読むと、本作の舞台は至る所に「置屋」が点在する島らしい。そして、「三兄妹」のいる「ある置屋」を仕切る、凶暴凶悪な性格で恐れられている長男の真柴哲雄は、佐藤二朗監督自身が演じているらしい。

そんな事前情報と予告編を見ただけで、こりゃ必見！そう思ったが、『キネマ旬報』6月下旬号での「REVIEW 日本映画&外国映画」を読むと、3人の評論家の評価は星2つ、3つ、2つと低評価だ。しかし、やっぱり観ておかなくっちゃ！

◆冒頭、兄の哲雄にこびへつらい、子分のように従っている次男の得太（山田孝之）が、島にやってきたお客にポン引きするシークエンスが描かれる。それを見ただけでアレレ、このセリフ回しは一体ナニ？また、哲雄に支配され、得太をバカにしているという「かげろう」在籍の4人の個性的な遊女たちが登場してくると、バカバカしいセリフ回しとギャグ狙いのようなバカキャラたちの共演にアレレ。

さらに、長年の持病を患い床に伏しているという長女・いぶき（仲里依紗）がうっとうしいセリフ回しで登場し、哲雄の素人芸が凄みを見せてくると、もうウンザリ。10分ほどで席を立とうと思ったが、端っこに客がいたため、何とか我慢して1時間。そこまで観れば、半分あくびしながらでも、最後まで観なければ・・・。

◆本作は全編を通して名優・山田孝之の「受け」の演技が目立つ。それに対して、哲雄役の佐藤二朗と病気の妹役の仲里依紗は「攻め」の演技に徹している(?)。しかし、佐藤二朗の不気味さは漫画的だし、仲里依紗の一見儂げな演技もシラけるばかりだ。

また、ミャンマー男のばかばかしいセリフにうんざりなら、ラストにウェディングドレスを着る不細工な遊女にもウンザリ。美人女優・坂井真紀演じる遊女の“仕切り”があったからなんとか最後まで座っていたが、佐藤二朗監督は、よくぞまあこんな原作、こんな脚本、とりわけこんなセリフとこんなキャラの脚本を書いたものだ。

◆チラシには「“虚ろな凶悪”と“透明過ぎる鬱屈”が、愛を求め彷徨っている・・・」という大きな文字が躍っている。このフレーズを観れば、私には佐藤二朗監督は日本版キム・ギドクを目指しているように思えてくる。

スクリーン上で哲雄が語る“虚ろ”の漢字と“嘘”の漢字を巡る“哲学”は面白い。それを見ている、本作はいかにもキム・ギドク的だ。しかし、私に言わせればこりゃ“偽悪趣味”としか言いようがない。したがって、それを集大成したスクリーンは醜悪そのもので、キム・ギドク監督の世界とは全く似て非なるものだ。

チラシに踊る「日本映画界のキーパーソンたちによる“狂演”＝アンサンブル 「映画への愛、そして狂氣的献身」によって生み出された映画を超えた魂の記録」が“虚ろ”なら、チラシに満載されている著名人たちのさまざまな絶賛の言葉もすべて“虚ろ”だ。

◆かつてこんな“醜悪”としか言いようのない最悪の映画があった、と思いだしたが、松本人志監督の『大日本人』（07年）（『シネマ15』410頁）。その評論で私は「こんな映画の一体何が面白いの・・・？また、キーワードとなる『ヒーローの表と裏』にしても、マゾヒスティックで不気味なだけ・・・？したがって、この映画は今年断トツのワースト1！そう断言した以上、いくら多勢に無勢となっても、また百万人の敵と立ち向かうことになっても、反論に対してはきちんと再反論していかなければ・・・」と書いた。

本作のばかばかしさはそれ以来で、私の評論は最低の星1つとしたい。なお、そこでは詳しく星1つとした理由を書いたが、本作はこれ以上書く気になれない。独りよがり、醜悪、キモいギャグにうんざり。また、喚けばいいというものではない。喚きゼリフのオンパレードにもうんざりだ。

2021（令和3）年6月14日記